

Title	英文構造の透明化傾向について：語用論的意味論の立場から
Author(s)	岩倉, 国浩
Citation	Osaka Literary Review. 7 P.21-P.33
Issue Date	1968-06-05
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25824">https://doi.org/10.18910/25824</a>
DOI	10.18910/25824
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 英文構造の透明化傾向について

— 語用論的意味論の立場から —

岩 倉 国 浩

### I

話者がある事象を起そうという意図をもっている時、英語では話者の意図を示す部分を表わさないでただ単に *You will get the pictures.* (あなたにその写真をあげますよ) ということがある。これはちょうど「話者の意志」を表わすやゝ古めかしい助動詞 *shall* が文 *You shall have a reward.* (お前にはほうびをとらそう) の中で果すのと同じ機能を上の文中では *will* がもっているとも考えられる。そのでんでいくと *He is going to have no part of this rotten life.* (彼にはこんなひどい生活はこれっぽっちだってさせられない) の場合は *is going to* が *shall* に相当する機能を果していることになる。ここまではいいにしても、*You are not getting out of here!* (お前をここから出しはしないさ) や *Nobody leaves here till we have ten dollars.* (10ドル集まるまでは1人だってここから出さない) に至っては *are getting* や *leaves* という形が *shall* に代る機能をもっているとは考えられない。本論ではこれらの文をすべて統一的にみることによって、文と話者の意図との関係を考察し、併せて英語の透明化傾向といったものを指摘し、それが話者とのどのように関係するかを明らかにしたい。

### II

Muriel Spark の小説 *The Bachelors* に次のような一節がある。

‘Carrie will have to go away to a home,’ said his old mother,  
‘if her arthritis gets bad.’ ‘No,’ said Martin. ‘Carrie stays here.’

— op. cit., p. 138 (Penguin Books)

(「キャリはもし関節炎が悪くなったらホームへでもやってしまわなくては。」と彼の老母が言った。「とんでもない。」とマーティンは言った。「キャリはここにおいときますよ。」)

問題の文 ‘Carrie stays here.’ は一見主語 Carrie の意図を描写した文に見えるが、実は ‘Carrie—stay—here’ という事象を起す力は話者の手中にあり、この文は「この事象を起す」という話者の意図を示す部分が裏にこめられた文で、ほぼ ‘I’ll let Carrie stay here.’ という内容をもつ文である。即ちこの文は内容的には命題文とそれに対する話者の態度を示す部分からなるはずの文で、I will let / Carrie stay here / happen とでも表わすことができよう。この // で包んだ部分は話者の「意図の対象」(Object of Intention) の表現で、// の外部は、話者の意図の表現で、Russell のいう話者の「命題への態度」(Propositional Attitude)<sup>1</sup> の表現に相当するものである。

さてここで上の文を次の文と比較してみよう。

‘... However I’ll see that he gets your message.’ ‘Thank you.’  
Mason said. ‘Tell him that it’s important.’ — E. S. Gardner,  
*The Case of the Nervous Accomplice* (「しかし、あなたの伝言は彼にきっとお伝えしましょう。」「ありがとう。」とメイスンは言った。「大事な用件だと伝えて下さい。」)

上の ‘I’ll see that he gets your message’ の文の ‘I’ll see that’ は ‘he—get—your—message’ という事象に対する話者の態度を表わす枠 (frame) で、枠の中味 ‘he gets your message’ は話者が自分の責任において実現させようという「意図の対象」<sup>2</sup> の表現である。この時もし話者が ‘I’ll see that’ という枠を用いずに / he get your message / という「意図の対象」である Semanteme の部分だけを表現して文 ‘He gets your message’ とした時、話者のこの事象に対する態度は裏にこめられ

ることになり、先の ‘Carrie stays here’ の文と同じレベルの文となるのである。

I'll see that / he get your message / → He gets your message.

I'll let it happen that / Carrie stay here / → Carrie stays here.

言いかえれば、‘Carrie stays here’ の文は本来ならば枠の中に表現されるべき話者の「意図の対象」そのもの（上の / Carrie stay here /）を枠なしで裸のまま独立文として表現した、いうなれば枠無し文（zero-frame sentence）であると考えられる。

次の例もいずれも同様のものである。

“I say this to you,” a young man shouted. “*The German who touches my wine or my wife pays for his touch in blood.*” — R. Crichton, *The Secret of Santa Vittoria*（「皆にはっきり言っておこう。」若い男が叫んだ。「俺のぶどう酒や俺の女房に手をふれたドイツ人はそれに対して血であがなわせるさ」）

*My people vote! You hear, they vote.* — “Hotel” [screenplay]（従業員に投票させるんだ。いいかい、どうしてもだ。）／…they heard a little girl call out nervously: ‘Charlie! Charlie!’ … ‘I was looking for Charlie. *He sleeps in my bed.*’ — R. Shaw, *The Sun Doctor*（小さな女の子が神経質に「チャーリ、チャーリ」と呼んでいる声が2人のところまで聞えてきた。「チャーリ [猫] をさがしていたの。私のペットに寝かせるんです。）」／“I find a man blabbing what he hears — *he’s out.*” — J. O’Hara, “Pat Collins.”（「ここで聞いたことをよそでしゃべる奴は — そんな奴はすぐ除外だ。」）／“*Little things really belong to you,*” she said folding the fan. “They don’t have to be left behind. You can carry them in a shoebox.” — T. Capote, *In Cold Blood*（「このちっちゃなものは本当

にあなたにあげましょう。」彼女はそのせんすを開きながら言った。「残しておいても仕方ありません。靴箱に入れてもっていらっしゃい。）」

### Ⅲ

「何が何すること」というように表象された Semanteme は本来 timeless なもので従ってこれを表現する形式は Subjunctive Mood が適している。(Subjunctive そのものの時制は主文, その他 Semanteme 以外のものの考慮によって規定されたものである。) しかし現代英語ではこのような Subjunctive の用法がすたれつつある。わずかにアメリカ英語に残っているいわゆる American Subjunctive がみられる程度である。

Mason might insist that she go to the authorities and make a clean breast of the situation. — E. S. Gardner, *The Case of the Foot-Loose Doll* (メイスンは当局に行って事情をすっかり話してしまうようにというかも知れない。) / His mother made it a family habit that they be left alone at this meal... — P. S. Buck, *Come, My Beloved* (彼の母はこの食事の時は家族以外の者は立入らないことを家族の習慣にしていた。)

そしてたいていの場合には Indicative Mood によってとって代わられてしまっている。即ち timeless な Semanteme を文又は節の形で表現する時は直説法の現在形か未来形で代用することになる。<sup>3</sup> この時理論上は時(time)をより感じさせない、しかも timeless な表現に適した Subjunctive により近い現在形の方が適しているといえよう。そして I'll see that he gets your message. のように従属節の中で表現される時はそれで問題ないのであるが、これを柁を用いずに従属節に相当する部分を He gets your message のように独立文で表現することになると問題が起る。即ち英語では今日, be, have などの状態動詞や think, love などの心的活動を表わす動詞は別にして get, write, kick など一般の動作動詞の現在形

の文は特異な文で特殊な context (「卜書き」, 「歴史的現在」など) 以外使われないという英語慣用上の制約がある.<sup>4</sup> 従ってすでにみてきたような *Carrie stays here.* とか *My people vote.* の如き枠無し文に現在形を用いることは余りふつうではなくやゝ特殊な例といえる. すなわち未来形の方がよりふつうで, 一体話者の「意図の対象」である「何が何すること」という Semanteme 自体は timeless なものではあるが, その内容である事象が実現されるのは, 当然のことながら, 発話時より未来のことであるため, この意味から言えば未来形の方がより自然であるといえよう.

今実例を1つあげて検討してみよう.

(1) *What you saw tonight will have no sequel.* — I. Murdoch, *A Severed Head* (今夜君が見たことはもう二度としないよ.)

(2) *As I have said, the thing has no sequel.* — *ibid.* (さっきもいったように, そのことはもう二度としないよ.)

上の2つの文は枠無し文 (zero-frame sentence) で共に同一の内容を表現した文で, 話者の意図は *I'll let it happen that / the thing have no sequel /* ということである. 今この2文の含む 'the-thing-have-no-sequel' という事象は, 発話時より未来に実現されるものであるため, (1)の文の方がより自然でかつ論理的であると感ぜられる. (もっとも(2)の文は(1)の文に比べ, 現在形で断定したため, 話者の決意がより強いことを感じさせる効果はいく分あろう.) この場合はたまたま動詞が *have* であるため(2)の如き現在形の文もそれほど不自然ではないが, 次のように *leave* の如き動作動詞の場合は, 英語の慣用 (Usage), 統語上の制約という点から言っても, 現在形の文は何となくごちない, すわりの悪い文という感を免れず, 未来形の文の方が英語の慣用にあったより自然なより英語的な文という印象を与えよう.

(1) '... I shall keep it here ...' He pointed at the piles. '*The fire will not leave here.*' — R. Shaw, *The Sun Doctor* (「それはここにおいとくんだ。」彼は燃えさかる薪の山を指さした. 「この火はここから動かしはしない。」)

(1) '*Calpurnia's not leaving this house until she wants to...* We still need Cal ...' — H. Lee, *To Kill a Mockingbird* (「カルパーニアは彼女自身がこの家を出たいというまではこの家から追い出すようなことはしない。我々にはまだカルが必要なのだ。」)

(2) *Alec, shut the doors. Nobody leaves here till we have ten dollars.* — *ibid.* (アレック、ドアをしめなさい。10ドル集まるまでは誰もここから出しはしない。)

現在形の文が生硬でぎこちない感がするというのは、見方を変えていえば(1), (1')のような未来形の文は、話者の「意図の対象」である *Semanteme* が独立文として完全に擬装 (*disguise*) された段階であるのに、(2)の如き現在形の文は、もとの *Semanteme* の面影をいく分残した段階であるということもできよう。

さて上で粹無し文としては現在形よりも未来形の方がずっとふつうであると述べたが、ここで未来形の粹無し文の代表的な実例をいくつかあげておこう。

'*Dr. Saunders tomorrow morning you will hear of something.*'

— J. D. Carr, *The Dead Man's Knock* (「ソーンダース博士明日の朝一寸したことをお耳に入れることになりましょう。)/ "You gotta

learn to take care of your things, or *you won't have anything.*"

— J. O'Hara, "The Butterfly" (「自分のものをもっと大事にしなくてはいけないよ。さもないともう何も買ってあげないよ。)/ "Or

maybe *she'll never do it again*, if she doesn't do good work this time," said Chester Weeks. — J. O'Hara, "The Engineer" (「もし

今度念入りにやってくれなければ、多分彼女には二度と頼まないだろう。」) チェスターウィークスは言った。// '*But you are going to get*

*nothing but four per cent.*'<sup>5</sup> — G. Greene, *The Heart of the Matter* (しかし君には4パーセント以外何もあげないよ。)/

'... *he's going to have no part of this rotten life. He's going to college and become a doctor, or a lawyer ...*' — J. Kirkwood,

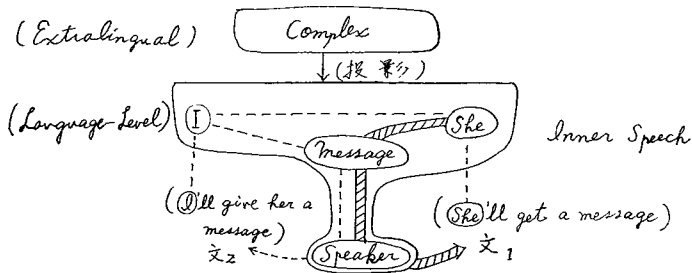
*There Must Be a Pony!* 「彼にはこんなひどい生活はこれっぽちだっ  
てさせられない。彼は大学へやって医者か弁護士にするのよ。」//

'In this case, though, it's better to tell you, *Caroline Kent is going up for trial. Murder.*'<sup>51</sup> — J. D. Carr, *The Dead Man's Knock*  
('この場合、しかし、あなた方にお伝えしておく方がよいだろう。カ  
ロライン・ケントには裁判を受けさせることになるよ。殺人罪で。')

'*She isn't going with you,*' I said. 'Can't you see she's afraid of you?' I. Murdoch, *A Severed Head* ('彼女をあなたと一緒に行か  
せはしない。')と私は言った。('彼女はあなたをこわがっているのが分ら  
ないのか')

#### IV

次に *She'll get a message in due time.*<sup>6</sup> (彼女には追って伝言をし  
よう。) の如き枠無し文がどのようにして生れるのかその過程を考察して  
みよう。これを示す試みの図は次のようになろう。



本来複雑多様な「意味」を、線的な (linear) 文で表現するのであるが、この時話者は内部言語 (Inner Speech) の段階でこの意味をどのように捉えるか即ち何にその視点をおき何の角度からこの意味を表現するかによって同一の意味を異なった文で表現することも可能である。たとえば話者は自分を、この意味の構成要素 (component) である 'She' とも 'Message'



とも関係づけずに、‘She’に視点 (Viewpoint) をおいて ‘She’の角度から表現すると、話者が全く文の表面に表われない impersonal な文 ‘She’ll get a message.’となる。この時話者と事象 ‘She-get-a-message’との関係は、当然、文の裏に隠されてしまうが、もしこの suppress されたものを、express すれば I’ll let it happen that she gets a message. となり、これは内容的には当然のことながら、話者が内部言語の段階で、事象を起す本人である自分と ‘She’, ‘Message’との関係をはっきりさせ、これを自分に視点をおいて表現した文 ‘I’ll give her a message’ (上図文<sub>2</sub>)と等しいのである。いいかえれば ‘She’ll get a message’の文と ‘I’ll give her a message’の文はここでは同一の「意味」をそれぞれ異なった視点、異なった角度から表現しており、前者は ‘She’についての、後者は ‘I’についての告知 (information) を与える文となっているのである。

要するに She’ll get a message の文は話者の ‘She-get-a-message’ という事象に対する態度を表わす枠の部分が suppress されているのであって、実質的には「主文 (話者の意図を示す枠) + 従属節 (話者の意図の対象)」 (I’ll let it happen that she gets a message) の意味をもっている文であるが、「従属節」に相当するものを転換して一つの「独立文」として表現したものと考えられる。

今この「主文+従属節」の形を備えているものが、話者の態度を示す主文の部分即ち枠が suppress されて一つの独立文として表現される過程を実例で示してみよう。

- (1) I promise after tonight you’ll never see me again. — “A Countess from Hong Kong” [screenplay] (今夜以後は誓って二度とお目にかかりません。) → (2) But I promise you something, Mom. This is the last time you’ll see me in this house. — J. O’Hara. “Money” (ママ、あなたに誓って言おう。もう二度とこの家のしきいはまたがないってね。) → (3) You’ll get your pictures, I promise you.

—“Blowup” [screenplay] (君の写真は返すよ、誓って。) → (4) But when I do get home *you'll never see me here again.* — G. Greene, *The Heart of the Matter* [zero-frame sentence] (しかし本国へ帰ったら二度とここへはやってこないさ。)

## V

さて今 Quine の術語を借りれば、<sup>8</sup> *I think that Jane will come soon* のイタリックスの部分、即ち *that*-clause で代表される「信念の対象」(Object of Belief) の部分は不透明 (Opaque) であり、不透明構文 (Opaque Construction) という。これに対し *Jane will come soon.* の如き独立文で代表される型の、全体としての一命題文は透明文 (Transparent Construction) であると言う。ここで注意すべきことは、この時 *I think that Jane will come soon.* → *Jane will come soon.* という変形転換が殆どもとの文の意味を変えることなく可能であるが、それは ‘*that Jane will come soon*’ が話者の「信念の対象」であるからに外ならないということである。このことは、もしそれが話者以外の「信念の対象」、たとえば Tom の「信念の対象」の時は、*Tom thinks that Jane will come soon* → *Jane will come soon.* という転換が許されないことを思い起せば容易に知れよう。このように英語では、話者の「信念の対象」の場合はその不透明に表現されるべき「信念の対象」を透明文で表現することが許されることがある。それどころか、できるだけ透明に表現しようとする傾向があるといえよう。たとえば次にあげるのはその傾向を示すほんの 2, 3 の例である。

〔法助動詞〕

*I feel sure that he is mad.* (Opaque) → *He must be mad* (Transparent) / *I think it impossible that the news is true.* (Opaque) → *The news cannot be true* (Transparent) // 〔文修

飾副詞] It is certain *that she will miss the train.* (Opaque) →  
 She will certainly miss the train. (Transparent) // [その他] It  
 seems [to me] *that Jack likes Mary.* (Opaque) → Jack seems  
 to like Mary. (Transparent) / I feel sure *that it will turn out  
 well.* (Opaque) → It is sure to turn out well. (Transparent)

そして我々が本論で扱ったような ‘Carrie stays here’ とか ‘She’ll get  
 a message’ のような文も話者の「意図の対象」である Semanteme を話  
 者の意図を示す枠 (frame) の中で不透明に表現しないで、これを枠なし  
 の透明文で表現したものに外ならないのである。

I’ll let it happen *that Carrie stays here.* → *Carrie stays here.*  
 [half-disguised] // I’ll let it happen *that she gets a message.* →  
 (*She gets a message*) → *She’ll get a message.* (completely  
 disguised)

そして現代英語にはこのような話者の「意図の対象」という timeless  
 な Semanteme を文の形で表現する特別な形式がなくて、通常「判断  
 (Judgement) 9」を表現する形式である Indicative Mood で代用するた  
 め、話者の意図とは無関係な客観的叙述文であるかの如く擬装されること  
 になるが、もし「表象 (Representation)」の表現形式として Subjunc-  
 tive Mood が今日もっと使われていて、\**Carrie stay here.* \**She get  
 a message.* とでもなっていたら、これは結局上でみた法助動詞や文修飾  
 副詞などによる英語の透明化傾向と軌を一にするものに外ならないことが  
 一層はっきりしたのであろう。

さて最後に上のような透明化がなぜ好まれるのかを考えてみよう。まず  
 第一に話者の「意図の対象」である Semanteme だけが枠なしの簡潔な形  
 で表現されることである。これは言語経済 (economy of speech) にも  
 かなったことである。次に「主文 (話者の意図を示す枠) + 従属節 (話者  
 の意図の対象)」では枠の部分が優位を占めるが、透明に表現することに

よって、話者の一番いいたい「意図の対象」の部分に優位を与えこれを聴者に強く印象づけることができる。<sup>10</sup> 第三に話者は、自分の意図を示す枠の部分を suppress することによって、Semanteme の主語の立場から事象を表現することになり従ってこの主語を close up することができ、かつ話者個人の意図の対象の表現でありながら自分の文に general な色合い、impersonal な色合いを与えることができるのである。<sup>11</sup>

このように英語では話者の信念や意図の対象に関係するところでは透明化傾向が顕著であるが、それは結局文の創造者であり発話者である話者の文における特権的立場を立証することに外ならず、ここに Carnap のいう Pragmatics<sup>12</sup> (語用論) の意義の一端がうかがわれよう。

〔註〕

1. B. Russell, *An Inquiry into Meaning and Truth* を参照のこと。
2. 即ち毛利教授の術語を借りれば「何が何すること」という Semanteme である。毛利教授は Semanteme を次のように定義する。  
The / Semanteme / may now be defined as: a representation of an (actual or possible) event which comes into someone's mind as an object of his belief, or as the Terminus of a mental relation with the believer as Fundament. — id, "The Speaker and the Sentence Subject", *Studies in English Literature* (English Number 1967)
3. 例えばその例を1つずつあげると次のようなものである。  
I said, "and I'll make sure they *keep* a seat for you on tomorrow's London plane." — G. Greene, *The Third Man* / I assure you she'll *get* every consideration from my office... — E. Queen, *Double, Double*
4. Cf. Sir Alan Gardiner, *The Theory of Speech and Language* §65
5. 'be going to' は 'will' に比べて主観的か客観的かという点ではいろ

いろいろな意見があるようだが、ここでは単なる未来の marker と考えておきたい。現にミシガン大学の English Language Institute では未来の助動詞として be going to 一点張りで初歩の者に教えているそうであるし、又 Joos も 'be going to' について次のようにいう。

Here there is no emotion, desire, intention, resolution, compulsion, or the like. That is to say, this is a completely colorless 'future tense' way of speaking. — Martin Joos, *The English Verb* p. 23

Cf "You could get that Abruzzi out of town..." "No, *he's going to stay. He'll be dressed like one of us. ...*" — R. Crichton, *The Secret of Santa Vittoria*. (「いいや、彼はここにおいておく。彼にも我々と同じ服装をさせよう。」)

5'. 現在進行形の文が未来の事象を表わしうることは周知のことであるが、たとえば Joos は次のようにいう。

'He's leaving' as a complete sentence is good enough for future reference, with one simple proviso: that the leaving *is known not to be occurring at the time of speaking* (his Italics) — Martin Joos, *The English Verb* p. 135

6. この文は次のような context で使われている。

[on the phone] '... And Miss Cydney isn't there either?' 'No, she's working. She'll be home around eight if you want to leave a message.' ... 'In due time, in due time. *She'll get a message in due time!*' — J. Kirkwood, *There Must Be a Pony!*

7. 言語形式は表現・伝達的手段で、表現・伝達されるものは人間の心的作用又は内容であり、この心的なものを言語形式と対照して「意味 (Meaning)」と言う。Cf. 毛利教授「英語意味論研究」

8. Cf. W. V. Quine, *Word and Object* (pp. 144—151)

9. Cf. Yoshinobu Mōri, *Judgement and Representation* (privately printed, 1956).

10. 粋無し文はしばしば激しい口調で話者の心の中の欲求をそのまま表わした表現であることを思い合わすべき、

My people vote! — “Hotel” [screenplay] / You’re not getting out of here! — E. Queen, *Double, Double* / She’ll get a message in due time! — J. Kirkwood, *There Must Be a pony!*

11. ここから、粋無し文は表面おだやかだが裏にすごみをきかせたおどし (threat) に使われることがある。

‘Let me see you do that once more,’ he said, ‘and you’ll be making a trip to Stafford.’ — J. Wain, *The Contenders* / That’s what’s going to happen to you if you don’t start pulling yourself together. — K. Amis, *Take a Girl Like You*.

12. Carnap は Pragmatics (語用論) について次のように説明する。

Within the semiotic of a language, three regions may be distinguished according to which of the three aforementioned factors (= the speaker, the linguistic expressions used, and the designata of the expressions) receive attention. Thus, an investigation which refers explicitly to the speaker of the language — no matter whether other factors are drawn in or not — falls in the region of *pragmatics*. — Rudolf Carnap, *Introduction to Symbolic Logic and its Applications*.